

編集後記

『和光経済』第49巻第1号をお届けいたします。ご投稿いただきました先生方に対して、編集委員会として心よりお礼申し上げます。今後も、先生方の研究成果の発表の場である『和光経済』の円滑なる発行に努める所存です。先生方からの研究成果のご投稿をお願い申し上げます。

2016年6月に英国の欧州連合（EU）離脱が決まりました。6月23日の国民投票で離脱が決まったのですから、これからは粛々とその手続きが始まることでしょう。はたして英国のEU離脱はEU崩壊の序章となるのでしょうか。数年前に筆者の姪のフランス人の義母から「EUの将来についてどう思うか」と聞かれたとき、「EUはThe Impossible Dream（見果てぬ夢）ではないか」と返事しました。彼女は「やはりそう思うか」と少し寂しそうな表情を見せました。

将来二度と戦争を起こさないという人類の高邁な理想を掲げ、紆余曲折のすえEU統合が成し遂げられました。その功績は2012年のノーベル平和賞がEUに授与されたことから明らかでしょう。しかしこれはかなり無理を重ねたうえの統合のようです。欧州大陸や英国の伝統的自由主義に鑑みれば、現在のEUがあたかも加盟各国を支配するかのごとき政治手法は、とくに英国人にとってはとうてい受け入れられるものではなかったでしょう。また共通通貨ユーロの導入にも無理があるようです。ユーロの導入はロバート・マンデルの「最適通貨圏理論」がもとになっているようですが、そもそも「最適通貨圏理論」は参加国の政策が協調できることを条件の一つにしています。EU参加国の政策協調度はギリシャの債務不履行問題などで露呈したようにかなり無理があるようです。現代欧州の自由主義にはフリードリッヒ・ハイエクの『The Road to Serfdom』1944年に代表されるような自由思想が大きく影響していますが、そのハイエクは『Denationalization of Money』1976年では中央銀行の存在を否定しています。つまりユーロ導入については反対ということです。ハイエク理論からみれば、欧州中央銀行（ECB）がユーロを通じてEUの金融政策を牛耳るのは無理なのでしょう。いずれ将来加盟各国が米合衆国の各州のような存在になる「欧州合衆国」が誕生すればその将来は、少しは「Possible Dream」になるのでしょうか。しかし「欧州合衆国」こそは「Impossible Dream」に違いありません。

（2016年7月 山田 久 記）

和 光 経 済 第49巻 第1号

2016年9月5日 印刷

2016年9月12日 発行

発 行 者 半 谷 俊 彦

制 作 八 千 代 出 版

〒101-0061 東京都千代田区三崎町 2-2-13

発 行 所 和光大学社会経済研究所

〒195-8585 東京都町田市金井町 2160